

「名教自然」と「Atom Nuclear 問題」を考える

渡邊一男（昭和26年応化卒）

私は旧制の最後であり、弘明寺キャンパス正面の「名教自然」碑を仰ぎ3年を過ごしました。「名教自然」について煙州さんの講話を二度聴いていますが、明確な説明はなく、断片的の挿話からの推測として「聖賢に学び士大夫たれ」と理解すべきと思っています。「名教」とは儒教、孔孟の教えを総括した表現であり、「自然」とは道教、老荘の教えを総括した表現です。碑の建立の1937年は支那事変勃発の年であり、その相手国の聖人に学べとは云いにくく煙州さんはボカしたのでしょう。

私自身の「名教自然」活動を例示しますと、1993年に厚生省の要請により「在郷軍人病予防ガイドラインの研究」を主査として6名の学識経験者の協力を得て行ない（200頁）、これが直ちに暫定規準となり、国の規準としては英国に次いで世界で二番目で、米空調学会（ASHRAE）から英訳して送れとの依頼もありました。翌年に東京渋谷で集団発生がありましたが、厚生省は面目を保つことができました。

また1995年には、米空調学会に「レジオネラ症抑制への現場試験」を報告したところ「技術論文賞」を受賞することとなり、その年が同学会の設立100周年に相当しており、新人賞・名誉賞を除く一般の部としては、日本で最初の受賞となりました。

レジオネラは空調冷却塔循環水中などに増殖する細菌で、現場技術者には専門外ですが、欧州の関連学会やペンシルバニア大学に学び、国内関係グループの支援を得て、それらを集約しての結果であり、「名教自然」の精神に副うものと思われま

す。次に「Atom Nuclear 問題」とは科学技術基本用語への視点についての理解と適用についての論議です。現在、世界では「Nuclear Power Plant, NPP, 核発電所」と表現していますが、日本のみは「Atomic Power Plant, APP, 原子力発電所」と表現しており、この状況への国際的印象としては、3.11関連の国際シンポジウムが大手町であったとき、ウクライナ（チェルノブイリ）の代表から、「日本はAtomで教育や研究ができる不思議な国」とのコメントがありました。

アメリカでは、原爆開発のマンハッタン計画まで

は「Nuclear」でしたが、1945年8月9日に広島でその成果が確認されると、これを8月12日に議会に報告するにあたって、主文の「スマイス報告」の表題を急遽「Atomic Bomb」にゴム印で差替えています。理由としては、「Nuclear」では議会・マスコミ・一般市民には理解されにくいとしています。アイゼンハワーの「Atoms for Peace」（1953年）はその流れです。

その後、科学者からの異論もあり、「1962年ケネディ・シーボーク報告」に至って表題は「Civilian Nuclear Power」となり、以後は政府の公用語もすべて「Nuclear」となっています。しかし日本では、グラストンの「Nuclear Reactor Theory, 1952」も伏見康治が「原子炉の理論, 1955」としています。私は2019年秋に台北に行き、原子能委員会・清華大学・台湾大学を訪問しましたが、台湾では従来組織は「原子能委員会」、新組織は「核能研究所」とし、通常用語には「以核養緑」と国際的の用語法となっています。

日本での「原子力」は科学雑誌の編集者が用語の統一をはかったとのことであり、文科省の教科書担当に尋ねると、「文科省に標準用語のリストはなく教科書作成者の自由であり、問題があれば関連委員会にて審議」とのことでした。しかし、アイゼンハワーの「Atoms for Peace」の公的機関による訳文をみると、原文のAtom・Nuclearの数と訳文の原子・核の数が一致していません。

東京都市大学の北澤宏一学長（2014年当時）にお尋ねすると、「アメリカにはジャパンカルチャーの語があり、3.11をもたらした日本人の付度的性格を揶揄した表現」とのことでした。また米大使館の原子力参事官に尋ねると、「アメリカ人にとってはAtomには戦乱、Nuclearには平和維持を連想させるものがある」とのことでした。

いずれにせよ、「原子力」は日本だけの特殊用法のようであり、「名教自然」で学んだ技術者・科学者としては一考の要がと思われます。

Planned Happenstance (プランド ハプンスタンス) 随想 [第14話] 趣味木版画に遭遇三度<その3>

藤平正氣 (昭和44年応化卒)

はじめに

木版画の<複数版多色摺り>は、“70の手習い”、いや正確には73である。2018年秋以降、本格的に自流の改良を始めた。さらに、2020年秋以降、他流の技法を勉強するため、よみうりカルチャー横浜(YCY)木版画教室に通学してきた。約6年間の学習や創作により、“継続は力なり”を実感できるようになってきた。同時に、材料や道具の調達、原画や下絵の作成、彫りや摺り、作品の額装、輸送と展示、等々の長い作業工程で、多くの“Planned Happenstance”(PHと称す)に遭遇してきた。“集中すれば深まり、連携すれば広がる”と言う仕事観が、趣味の世界にまで追いかけてくる。これらのお世話様で飛躍したい。

出身会社美術クラブ(MGC)展示会

2019年から2021年まで、“<COVID-19>禍を転じて福と為す”の集中により、自流の改良が進展した。その結果、<複数版多色摺り>の作品を合計7点、額装仕上げで出展できた。出展を続ければ、“そのうち何とかなるだろう～”の心に確信を抱いた。

2022年から2024年まで、YCYの木版画教室で、下絵、位置決め、彫り、摺りの他流を作品毎にその都度、学習してきた。その結果、<複数版多色摺り>の作品を合計11点、額装仕上げで出展できた。これらの作品のうち、自己満足度80点以上と言える作品も数点得られ、その進歩を他者からも評価されるようになった。

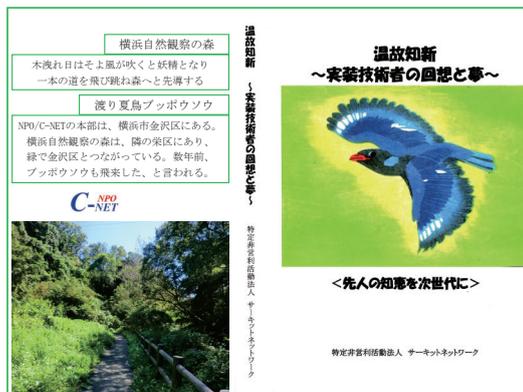
NPO法人サーキットネットワーク(C-NET)

C-NETでの活動は、2014年7月の本誌寄稿、『PH随想[第6話] / C-NETと国大化学会先輩諸兄』で詳しく紹介した。私は、このC-NETに21年間在籍し、現在も活動主体の一つである。第4代理事長に声をかけていただき、私の<複数版多色摺り>が、出版される<アーカイブス書籍>の表紙で日の目を見ることになった。木版画と写真と詩の組み合わせで物語りを創作し、候補作品3つを理事連絡会に提案した。討議の結果、「渡り夏鳥ブッポウソウ」が、『温故知新～実装技術者の回想と夢～<先人の知恵を次世代に>』の表紙絵となり、2023年5月31日付けで初版1刷が出版された。さらに、「天女は弥勒菩薩」が、『C-NET20周年記念誌』の表紙絵に採用され、“神も人もそして技術も過去に抱かれ現在を生

き未来を照らす存在である”と言う次の10年へのメッセージを付し、2024年6月3日付けで発行された。これら2つの成果として、関連する木版画を掲載した。おわりに

“出展を続ければ様になる”を信じ、<複数版多色摺り>の作品を年4点のペースで、その額装仕上げを出展することに集中してきた。その結果、YCY木版画教室に通学してきたのに、他流の技法を系統的に習得できていない！ことが気になりだした。また、作品1点を額装まで仕上げる時間は、100～200時間を要してきた。その半分が彫りの時間なので、“彫りで疲れて摺り切れる”の心で、摺りの妙味を作品に活かし切れていない。前記2点の取組みを優先すれば、寡作になるが大きな飛躍を期待できる？！従来通りの和み優先で、ボチボチの進歩で、年4作品を創り続けるか！？趣味の世界でも不易流行と臨機応変の対処を要求されるとは！世の事象すべては随所でつながっている、の実感である。

(令和6年7月3日 記)



2024年度「昭和53年卒業 電化・応化合同同窓会」報告

上野則幸（昭和53年電化卒）

今年の「昭和53年卒業の電化・応化合同同窓会」は、湯河原温泉の千代田荘にて2024年6月21日（金）から6月22日（土）に実施しました。

近年のコロナ禍の影響で3年間休止していましたが、昨年6月から再開し、今年も6月に湯河原温泉で開催しました。従来は、毎年5月末に熱海にて実施していましたが、ずっと幹事をしてきている友常さんが数年前から、毎年5月末にスペインの「サンディアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」をご夫婦で歩かれているため6月に企画してくれました。

初日には梅雨入り宣言がありましたが、同窓会の2日間ともに天気が良く、最近では最高人数20名（応化3名：石垣氏、金子氏、高松氏、電化17名：青江氏、赤崎氏、伊香賀氏、稲葉氏、上野、大塚氏、大渡氏、小野田氏、木村氏、栗山氏、白石氏、鳥羽氏、友常氏、中島氏、中原氏、長野氏、長谷部氏）

の出席でした。遠くは鹿児島、仙台、兵庫、長野、愛知、奈良等々から参加があり親睦を深めました。

今回は、残念ながら昨年お亡くなりになった江戸氏の黙とうから始まり、例年のように一次会、二次会と予定通り夜中の0:00まで盛り上がりました。各人の近況発表があり、家族、怪我や病気、仕事、夫婦の関係等々を含めた内容で、お互いに参考になり、納得、確認しました。私も皆さんの発表を聞くことにより、希望や活力をもらったように思います。

翌日の朝食後には、別れを惜しみ、来年も友常さんに開催の企画をお願いし、来年の参加を誓い合い解散しました。

今年都合により参加されなかった方々にも是非来年は参加されることをお願いし同窓会の報告と致します。



化学 EP の学生を含む5人組「HARIBOW」 ダブルダッチで英国のテレビ番組「Got Talent」ファイナル進出！快挙達成

会誌グループ 星野雄二郎

化学EPの海野鷹幸君が参加している5人組「HARIBOW」(ハリボー)が、英国の人気テレビ番組「Got Talent」(Britain's Got Talent:略称BGT)のファイナルに進出し、高い評価を受けました。彼らは高いパフォーマンス技術とダブルダッチへの情熱で英国の視聴者の心を掴みました。ダブルダッチは2本のロープを同時に回し、その中で様々な技を披露するスポーツです。HARIBOWは難易度の高い技術と見事なチームワークで観客を魅了し、その演技はダンスやアクロバットのような迫力と美しさを持っています。

「Got Talent」は世界中から才能あるパフォーマーを集める番組で、「シルク・ド・ソレイユ」と並びパフォーマーの最高峰と言われています。イギリスはその本家であり、世界中から注目を浴びる番

組です。HARIBOWは日本国内での実績を積み、海外での挑戦に臨みました。彼らのパフォーマンスは審査員や視聴者から高く評価され、SNS上でも多くの賞賛の声が寄せられています。番組が始まってから17年の中でも群を抜いて観客が盛り上がり、番組史上初となる制度を作り出すほど、イギリス国内でも大きな注目を浴びました。

「とにかく明るい安村」を超えて日本人最高記録となるファイナル進出により、HARIBOWはさらに大きな舞台での活躍が期待されています。彼らの情熱と努力が結実し、世界の大舞台で輝きを放つ瞬間は、多くの人々に希望と感動を与えました。HARIBOWのパフォーマンスは、まさに技術と美の結晶であり、その姿は若者たちに夢を追い求める勇気を与え続けるでしょう。

